

行書のQ&A その5

山梨大学教授

宮澤 みやざわ正明 まさあき

Q22 「どのような指導をしたら、速書きとしての行書を日常に生かすことができるでしょうか。」

A 中学校国語科書写の主な目標は、文字を読みやすく速く書くための書写技能の習得にあります。速書きとしての行書の基礎・基本を習得するだけでなく、さらにその技能が、学校生活や日常生活でノートやメモをとったり、手紙や葉書などを書いたりするときに役立てられるようにすることが求められています。いわゆる「書写学習の日常化」が、小・中学校国語科書写の最終目標であり、集大成といえるでしょう。

したがって、このような質問が投げかけられることは、国語科書写の最終目標を見据えているからにはほかありません。小・中学校を問わず、書写を担当する指導者は、常にこのことを考慮して授業を計画し、実践することが大切だと思います。

では、速書きとしての行書を日常に生かすためには、どのような指導方法があるのかを、考えてみましょう。

より円滑に進められるように工夫したいものです。

2 行書に多く触れて親しむ

新しい書体の知識・技能を習得するには、行書で書かれた文字にたくさん触れて、親しむことから始めなくてはなりません。そのためには、行書による文字環境を整えていきたいものです。小学校低学年の教室には、平仮名五十音図や新出漢字が大きく掲示してありますが、これと同じことを中学校でもしたいものです。行書の特徴は何か、その字例を大きなカードに書いて掲示する必要があります。これらは、指導者が作成することはありません。書写の授業で学習した行書の字例を、生徒が交代で作成すればよいのです。では、指導者は何をするのか。既習の行書文字やその応用文字を、連絡文書や板書などで使用することです。特に、板書文字は生きた教材です。

「速く書く」と、文字に丸みとか連続線がでるよね。糸偏は…行書ではこう書くんだっただよな…。」

など、さりげなく独り言のふりにつぶやくだけでも、効果があるのではないのでしょうか。試してみてください。

3 行書で速く書けることを体験する

行書の特徴を知るだけでは、速く書くことはできません。また、毛筆で大きく書いていただけでも、速く書けるようになったとの実感はわからないものです。行書で速く書くことができたという体験をすることで、行書の意義を実感し、使ってみたい、書けるようになりたいとの

1 行書の意義を考える

以前にも述べたことですが、中学校書写では、速く書くためにはどうするかということが主な学習内容になっています。その結果として、楷書より速く書ける行書が採用されていることを、指導者も生徒もしっかり認識しておくことが大切です。生徒にとって、行書学習の目的・意義が明確でなければ、学習への動機づけが弱くなります。次に、なぜ行書だと速く書くことができるのか、それは行書の特徴のどの部分によるもののかを、実際に書きながら知識・理解として獲得することで、行書学習の意義がさらに明らかになってきます。手本を見て、ただ似せて書いているだけでは、行書の意義は伝わりにくいと考えます。

とはいえ、中学生にとって、未知の行書には不思議な魅力があるようです。自分の文字スタイルのレパートリーが広がるというだけでなく、ちょっと大人になった気分を味わい、楷書に比べて芸術的であるとも感じるようです。この興味・関心をつまみつかんで、行書学習を

意欲が出てくるものと思います。

そこで、次のような方法はいかがでしょうか。

各自が選んだ短文(できるだけ名文が好ましい。一〇〇字程度)を楷書で丁寧にゆっくり書き(筆記具は硬筆)、かかった時間を計測する。それを各自のもちタイムにする。

定期的に、同じ短文を行書の特徴を生かして速書きして計測。もちタイムと比較しグラフ化する。

一年間のまとめとして、定期的に書いた短文とグラフを発表し、タイムのアップ率や行書の定着度を評価し合う。

この方法によって、行書学習への動機づけになるとともに、もちタイムを上げる目標ができ、行書への関心が高まると思います。また、短文は各自が選ぶので、国語の読みとの関連が生じ、横断的学習を図ることが可能になります。文章選びから、挑戦が始まるというわけです。また、文章が一人一人異なるので、書写にありがちな相対評価を避けることもできます。一年間継続することで、知らぬ間に行書の日常化へ入り込むことができるのではないのでしょうか。

次回も、行書の日常化をめざした工夫を考えてみたいと思います。